家族との手紙

＊次兄 熊雄との書簡

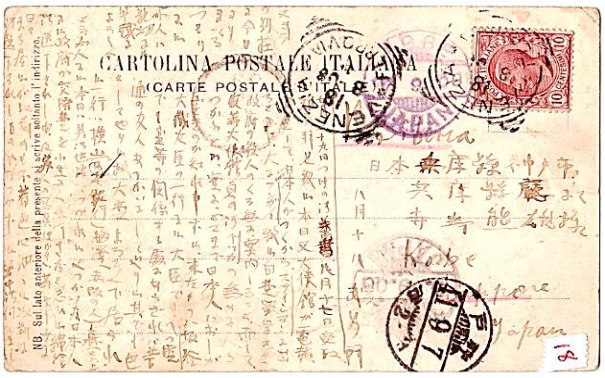
膨大な資料より 530 枚以上のハガキを解読し、調査研究を深めた。その一部を紹介する。

＜イタリア留学の様子を報告＞

＜1908(M41).7.1／8.18＞　No.16,18

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎熊雄（神戸）

「…絵や美術史の事を研究。イタリアでは、現時よりも過去の美術が最も趣味多く有益なる教訓を与えてくれる…」　「…本日また日本大使館から電報が来て、日本人が到着するからステーションに出ろとのこと、憤慨した。自費留学生や政府の役人が来るたびに、毎回案内しろということで、大使館員のおべっかのために人を使うとか、実に日本人は押しが太いことか…」



＜1908(M41).9.9／9.27＞　No.2,4

寺崎熊雄（神戸）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…大使館からの電報で大分フンガイの様子だが、前に高平大使に厄介になったのだから、あまり怒るな…」「…（農商務省）練習生になる事も良かろう。報告などの材料は、領事に頼めばできるだろう。こういうこともあるから、大使館の言うことも時々聞いてやるのもいいじゃないか」

＜1909(M42).1.20／2.7＞　No.25,26

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎熊雄（ヴェネチア）

「…ベニス商業高等学校（大学）の先生になった。イタリア第一の学校で、なかなか名誉なもの…農商務の報告を書かなければならない。絵の勉強は目的なので、一層励んでいる…」
「…日本語教授は好成績。農商務の報告の下書をしている。活動する方が親のお金を使うより気持ちがよい…」

＜美術に関して語り合う兄弟＞

＜1908(M41).10.27＞　No.23

寺崎熊雄（?）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「文部省展覧会…白馬会出品を日本の絵画界の模範と思っていると、前世紀の話だと笑われるぞ。イタリアまで行ったからには、しっかりしないと日本に居る奴に負けるぞ。日本画で「釈迦」と「頻王」「大仏開眼」などは、おまえの訪欧謁見の画と同し様であった。総ての人が似て居ると服装体度に変化ないことは、あの様な画の欠点である。服装、容顔、骨格等につき歴史や人種を研究しないのは、災を買うものである。大作の歴史画を描くとすれば少し考えねばならぬ、自然以外へ事研究を要する…」

＜1909(M42).3.20＞　No.27

寺崎武男（?）→ 寺崎熊雄（神戸）

「…一大革進をもって勉学致している・・絵の道は進むほど目的に遠ざかる気がする…この頃は絵画について一大疑問起こり、絵画の理想的ならざる感起きている。それは美術は、天然のコピか理想のコピか、天然によって理想を表す可き事なるかついてである。理想の大王たる佛教哲学など知り、新しい美術を起こさないといけないと思う…」

＜1912(M45).1.29＞　No.12

寺崎熊雄（神戸）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…絵の事については門外漢ながら少し申すが、画法画料の発見、甚だうれしい。しかしどんなものだか見ないから、何も言えないが、画は美術であるから、なるべく多くの人に快感を与える様に、美しいものであってほしい。又、画は千万年に伝えるべきものである、それゆえ、その画法画料は共に永久不変、気候の変化に耐ゆるものであることは重要…」

家族との手紙

＊母 セツ、長兄 渡夫妻との書簡

＜互いを想い合う母セツと異国の息子・武男＞

＜1914(T3).2.8／3.12＞　No.14,16

寺崎セツ（赤坂）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…私は送金しないと言ったわけではなく、お前の帰朝も段々遅くなるので待ちかねて、そちらで金を使うより、日本へ帰り使う方がよいと思った。けれどお前の都合も有るので、何事もお前の心にまかせる…」
「金は私の手元を心配せず、入用の時はいつでも送金する、無理をして身体を悪くすると、それこそ困る。金はなくとも心を清く…」

＜1915(T4).6.29＞　No.31

寺崎セツ（赤坂）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…私の願いはお前の帰るまで丈夫に生きていたい・・帰朝後の暮らしは心配に及ばない、私の手元に持ち合せある…」

＜1915(T4).10.14＞　手紙

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎セツ（赤坂）

「…最大の生活の希望及理想は、母上に孝養を尽くすこと…、絵画を以て家名をあげること…。
…学校の教育事業も将来日本の発展と共に重要と感じていて俸給も高い。絵の方でもう少し名があがり、金が取れれば、半年ずつ日本と西洋に住み、日本の風景を西洋へ、西洋のを日本で展覧会すればやっていける。　…男子はまず自分の位置と職業は立て、生活の土台作った後結婚などは考えるべき。小生 35 歳までは大活動し、先進派独立派の絵画に旗揚げしそれが有効なら一家の大家となる道につく。　…人に劣らぬだけ研究したく、実地に美術史を研究する者として日本第一人者でありたい、いずれは西洋、特にイタリア美術史の論文を提出して博士号までとろうという意気。　…帰朝は来年、帰朝費 700 円希望…
…母上からのハガキで無事か知ることが自分の生活の最大なる喜び。長く母上をお一人にして心苦しく、必ず一日も早く帰朝して日本で成功し、…母上に御孝養申して、これまでの不幸の取返しをしたい…」

＜帰国～実家の火災と第一次世界大戦＞

＜1916(T5).1.1＞　No.C1

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎渡・えつ（麻布）

「…災害（赤坂の自宅火災）にもかかわらず皆様御無事御健康を願っている。定まれる運致方もなく、母上様はじめ皆様の残念な思い余りある。そのため御体でも痛むようであっては、二重の不幸と案じている。運に打勝ち開運の緒を挙げんと小生も一層奮励努力する。航路の安全なり次第、帰朝を切望する。遠く、長らく、母上の御傍を離れている罪、今更の如く心を痛めている。一家の盛栄と御無事を祈願している。…」

＜1916(T5).1.27／2.1＞　No.10,11

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎セツ（赤坂）

「…20 日以上便りが無かったので常に案じていた。小生の最大の希望は、母上の健康な姿を早く帰朝して見ること…（日本語教授を終え）直ちに帰朝するつもり。」
「…帰朝費拝受、大事に保管している…」

＜1916(T5).7.23／8.1／8.11＞　No.21,22,手紙

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎セツ（赤坂）

「…戦時の生活は愉快ではないが、一生にこの世界の一大事件、歴史上の最大要期を…経過するは、将来の潮向を推察する重要なるもの…滞在は決して無益ではない…」「海上危険ただならず、帰朝は時期を待つよりほかない…日中写生はできず、仕事としては美術学理の研究に余念なし…」「…どこまでも熱心な研究家でいたい、光栄は従いてくると思っている…独立して生活が出来るかがまず第一の問題…」

＜1916(大正 5).10.31＞　No.27

寺崎武男（ヴェネチア）→ 寺崎セツ（赤坂）

「…正月頃に日本に着予定。老いたる母に小生が安泰を望み、母を顧みず帰朝しないと恨まれては不本意。子としての義務も立たず、恐ろしき旅をすることを決めた…」